天遊

大阪教育大学 広報誌

VOL.12 2009. AUTUMN

歴史が育む人と未来。

特集 開学60周年に寄せて その2 ……P2〜P5

記念座談会 「大学の歴史」を振り返る

■地域に貢献する先生の卵たち…P6
FMかしわらじぃ

■附属学校ニュース ……P7
附属高校天王寺校舎のSSHの取り組み

■授業紹介 ……P8〜P9
音楽教育講座
日本アジア言語文化講座

■活躍する卒業生……P10〜P11
正井三枝子さん(米子市美術館長)
蔵重優姫さん(韓国舞踊家)

■学部改組について…P12〜P13

■センター紹介……P14
教職教育研究開発センター

■トピックス ……P15〜P16
職員紹介「広報室」 アマチュアボクシング 好川菜々さん
平成22年度 入試日程　新ロゴマーク紹介 など

発信する大教大
大阪教育大学
開学60周年
(創基135周年)

開学60周年に寄せてその2
～記念座談会を開催～

出席者
（敬称略・順不同）

廣畑　力　大阪学芸大学昭和29年卒
岡本修一　大阪学芸大学昭和31年卒
野口克海　大阪教育大学監事
長尾彰夫　大阪教育大学学長

◆学ぶ中で教職をめざした

長尾　本学は大学になってから60年の歴史を有しています。ひと口に60年と言いましても、様々な起伏に富んだものであり、60年を4つの時期に区分できると思います。第1期が1949年（昭和24年）の「大阪学芸大学」としての発足から67年（同42年）の「大阪教育大学」への学名変更まで。第2期が学名変更から1991年（平成3年）の柏原キャンパス移転まで。第3期が柏原キャンパスのスタートから法人化移行までです。そうしますと、2004年（同5年）の法人化以降は第4期になるのではないか。このような節目をもちながら本学がいかなる課題に立ち向かい、60年の年月を重ねてきたのか。それぞれの時期区分ごとに、歴史的な検証をしていきたいと考えています。

さて、本日はその第一期の大学発足前後について本学出身の先輩先生方にお聞きしたいと思います。まずは自己紹介を兼ねて、大学との関わりをお聞かせ願いますか。

廣畑　わたしは昭和25年大阪学芸大学・中学4年課程の入学、29年卒業です。第2期生になります。最初の2年間は池田分校で、後の2年間は天王寺分校でした。わたしは歴史の研究室に入って

いました。卒業論文は、山岡桂二先生にご指導をいただきました。卒論のテーマは「明治維新史」でした。明治維新の原動力として下級武士の他、地方の豪農豪商が大きな力となったことなどを研究テーマに取り上げました。

岡本　わたしは昭和27年大阪学芸大学・小学4年課程に入学、昭和31年卒業の4期生です。最初2年間は平野分校で、後の2年間は天王寺分校で大学生活を送りました。教育学を専攻しましたので、教育学研究室に入らせていただきました。担当の指導教官は柳久雄教授でした。生活綴り方を軸として、民間教育運動が教育実践の中身にどのような影響を与えたのかを中心にした卒業論文でした。

長尾　学芸大学になったばかりの当時の学生気質についてですが、教職に就いたとしても先生の給料はとても安く、生活もままならぬ状況だったと聞いています。それでも教職をめざす学生が多かったのでしょうか。

岡本　当時の学芸大学入学時の学生は、わたしの印象では必ずしも教師になるという目的意識はもっていなかったのではないかと思います。ただ、大学で学び教育実習等を経験する中で教師になろうという意識が高まり、教職希望を強くもつことができたのではないかと思います。

長尾学長

廣畑氏

長尾　学生の意識の中では、教師になるつもりはないと思って入ってきた学生も卒業する頃には教師になるということがたくさんあったと聞いています。

岡本　それは、教育実習と日頃の講義の影響だと思います。師範出身が講義で強く影響を受けたのは、森信三先生の「教育者の道」に代表される講義（「修身教授録所収」）になるようです。わたしの場合は「教育・国語教育」を論じられた弥吉菅一教授の講義をはじめ、多くの先生方の講義とご指導であったと思います。それが、教育実習の難しさと共につながったようです。

廣畑　大阪学芸大学に一時、学芸コースの二年、四年課程ができたことがありました。そこに入学してきた学生の動向を調べてみますと、卒業後は教師になっているのです。大学で学ぶ過程で教職に魅力を感じ、単位を揃えて教員免許を取ったのだろうと思います。

長尾　今のお話を総合しますと、入学してきた学生の多くが結果としては教師をめざすようになったと考えてよいと思いますね。

廣畑　開学当初は、わたしのように、師範学校予科を経て、学芸大学に入学した人たちがかなり入っていましたね。わたしの時代はまさにそういう過度期でしたね。

長尾　ところで、当時、教師は薄給で生活的にかなりしんどかったということが伝えられています。それでも教師になりたかったというのはなぜなのですか。

岡本　給料等の処遇はあまり考えていませんでしたね。学校現場は、校舎改築のため2部授業、条件は悪かったのですが、3年生の子どもとの生活が楽しかったですね。毎晩、ガリ版で文集を作ったことを思い出します。

◆学芸大学の教員の意識について

長尾　大学での教員の授業はどうでした。教育技術云々ではなく、かなり学問を重視したのではないですか。大阪学芸大学の先生方はかなりアカデミズムへの志向が強かったと思いますが。というのは、師範学校から学芸大学に移行するときに厳しい審査があり、研究者としての力量が問われたということがあったようです。また、他の大学から著名な研究者が教授として来たということなどもあり、大阪学芸大学の教員の雰囲気はアカデミズム志向がかなり強かったということが、様々な資料から読み取れるのですが……。

岡本氏

廣畑　学長のおっしゃるとおり、学芸大学になり、学問をしっかりやろうという雰囲気が強くなったのは確かだと思います。新生の意気に燃えていたように思います。

岡本　わたしたちの時代は、3回生になると天王寺分校で各研究室に所属し、専門分野の指導が多く行われていたように思います。また、すぐれた研究者としての若手の学者が、助手、講師としてたくさんおられました。

　各研究室で、輪読会も含んだ演習が行われ、専門的な研究が活発に行われていたと思います。わたしの所属した研究室での卒論のテーマを思い出しますと、それはかなりはっきりしていました。それに自由でしたね。様々なテーマをよく受け入れて、指導していただきました。

廣畑　当時を振り返ってみて、あまり教授法、教育技術云々と言われた記憶はありませんでしたね。

野口　わたしが新任で赴任した頃の、40～50歳代の師範学校卒業の先輩方ですが、その教授法は見事でした。例えば、筆をもたれたら素晴らしい字を見事に書かれ、黒板の板書の字もきちんとしていました。号令のかけ方でも、泳法でもすごかったです。しかし、学芸大学に変わった途端、それを全部捨ててしまったのですか。

長尾　捨てたというのではなく、教授法や教科教育法は弱体化したというべきだと思います。その背景には、戦後の国の教員養成政策が大きく影響したと思うのです。教授法といった教育的な内容は、カリキュラム上はあったとしても、大学の中で重視されなかったのではないかと思います。

廣畑　師範学校時代の学科課程表をみますと、学年配当では高学年になると教授法ばかりですね。

岡本　師範時代の授業は教材研究や教授法が中心だったと聞いています。しかし、今の現場での具体的な教授法については、現場の同僚との間で磨かれていくものだと思います。授業を通じて学び合う同僚による成長が基本、「教師は学校で育つ」です。大学では教材研究の基本を教えるべきです。しかし、教育実習を担当している人たちに聞きますと、実習の2か月前に担当学年・学級が分かっているそうです。ですから、せめて実習前に大学で、具体的な指導案の書き方、教材研究の進め方を指導してほしいと言っています。

野口監事

◆寮生活が教師育成に大きな役割

野口　寮の存在は師範学校では大きいものがあったようですが、具体的に教師として育つうえで寮生活がどのような役割を果たしていたのか教えてほしいですね。

廣畑　師範学校は原則全寮制でしたが、生徒が多くなると、一部は自宅や下宿から通った人もいました。しかし、寮での生活が教師として育つうえで大きな役割を果たしたのは事実です。

岡本　師範での寮生活はその後の教師生活に大きな影響を受けたと、先輩たちは述べています。集団生活のマナー、行動様式を徹底的に叩き込まれたようです。特に、清掃検査(窓や床拭きなど)の厳しさを伝える人が多いようです。

長尾　学芸大学になって寮は残りますが、そういうしつけなどの教育的機能はなくなりました。従って、「師道」とかいうことを伝達していくシステムや制度は戦後の学芸大学にはないのです。むしろ、戦後すぐの場合は、学芸大学出身の人は、学校現場に就職して師範出の先輩から鍛えられたということのようです。

◆教師は学校で育つ

廣畑　わたしは、中学校ですから社会科と国

語科の免許を持っていますが、最初に就職した学校では、職員間で新任教師を育てるという雰囲気がありましたね。初めの頃は、指導を受ける側のわたしは非常にしんどかったのですが、かなり鍛えられたという気がしますね。宿直もありましたし、新任はわたし一人ではありませんでしたから、そこでいろんな話を聞きながら教えられました。

野口　初期の学芸大学卒の人たちが現場へ行ったときは、周りは師範出の先輩ばかりですよね。教育現場に、教師を教師たらしめる力があったということですね。

長尾　教師を教師として育てる力が現場にないといけない。ところが、最近はそれが非常に弱くなった。だから大学でもっとやれとなってくるのです。

1955年当時の大阪学芸大学天王寺分校・学園ホール

岡本　まさにそこです。これは本当に困ったことです。教育委員会や教育センターでも様々な工夫をしているようですが、教育現場の多忙さ、様々な仕事が入ってくるでしょうが、授業を中心とした研修に没頭できるような時間を取り戻してやりたいですね。

長尾　大学における教員養成のためのカリキュラムには、教育実習が教員養成大学のカリキュラムの中心、コアにならなければならないと思っています。本学では、4年間の積み上げ方式の教育実習をやっています。教師を教師として育てていく、現場と大学とをつなぐカリキュラムがあるとするなら教育実習です。

岡本　わたしのときは、教育実習6週間、地方実習（そう呼んでいた）1週間の計7週間は、先程申した通り、教職への道をはっきりと学生が見定めるポイントとなる期間といえるでしょう。今は制度として4週間と定められているようですが、期間を増やすこと、実習前の指導内容とか、もう少し構造的に捉えなおすことが必要ではないでしょうか。

教員養成の指針、教師の使命感を

長尾　最後に、大学への提言を。

廣畑　「大阪の教育に責任のもてる大学」という、学長の掲げられた言葉に感銘していまして、大学院改革、教育実習の改善などに果敢に着手しほしいのです。それから、教員養成大学なのですから、こういう教師を育てるのだという指針を示していただければありがたいと思います。

1956年、教員と学生ら

岡本　最近、教師には使命感が必要だということが言われていますが、教師の使命感の内実を明らかにしてほしいと思います。それは、次の時代を担うたくましい子どもの育成をめざすという任務につながることと思いますが、思いきった提言を大阪教育大学からしていただければ、大阪から発信する教育が生まれるのではないかと思います。

（広報室）

■出席者の略歴

廣畑　力氏【ひろはた・つとむ】
昭和29年大阪学芸大学卒。大阪市立中学校教諭、校長、大阪市教委首席指導主事などを歴任。㈳瓊池会専務理事。

岡本 修一氏【おかもと・しゅういち】
昭和31年大阪学芸大学卒。昭和51年大阪教育大学大学院修了。大阪市立小学校教諭、校長など歴任。㈳友松会理事長。

野口克海氏【のぐち・かつみ】
昭和42年、大阪学芸大学学芸学部卒。富田林市立中学校教諭、大阪府教委指導第二課長、理事などを歴任。

長尾 彰夫氏【ながお・あきお】
大阪教育大学卒。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士。専門は教育方法学。

その1

FMかしわらじぃ

コミュニティーラジオ「FMかしわらじぃ」が元気
大教大生と柏原市民が協働で制作

学生と市民からの柏原情報発信!!柏原市民と大阪教育大学生が協働で創るコミュニティーラジオ「FMかしわらじぃ」が元気です。この番組は、FMちゃお(79.2MHz)の柏原市の広報番組の枠内を利用して、大阪教育大学生と柏原市民が協力してつくるコミュニティーラジオです。番組内では、柏原で育った芸人の記録!?柏原発見!エコ・トークなど、地元・柏原に徹底的にこだわったユニークな番組を放送しています。

「大阪教育大学を地域の財産にしたい」。地元・柏原で地域の環境問題に取り組んでいる西村優子さんが、同じく地域連携活動などにかかわる学生や、大教大の放送研究会に声をかけ、昨年夏に立ち上げました。学生と市民が協働でラジオ番組をつくるというアイデアを柏原市の街づくりコンテストにエントリーしたところ優秀賞に入りました。その勢いで柏原市に相談し、柏原市とコラボするラジオ放送としてスタートしました。

長尾学長をインタビュー(7月22日)

本格的に番組提供がスタートしたのは今年4月からで、この夏始まった「大学職員紹介コーナー」では、7月22日長尾彰夫学長をインタビューし放送しました。また、メンバーのスキルアップをめざして、8月31日、大阪市浪速区湊町のFM大阪を訪問、スタジオで生の収録現場を見学しました。参加したメンバーは、プロのDJのしゃべりのすごさに「しゃべりの格闘技だ」と驚いていました。この日は、FMかしわらじぃの「エコ・トーク」コーナーでハーブをテーマにした番組のデモCDをFM大阪の収録スタジオで流してもらいました。作品を聴いた営業局マルチメディアプロモーション部の小田切武史副部長からは「しゃべりが自然でなかなかよかった。重複部分を刈り込んでいけば、もっといい作品になります」とのアドバイスをいただきました。

代表の岡見厚志君(中学校教員養成課程4回生)は「FM大阪の充実した施設設備に驚きました。たくさんの人に聞いてもらえる、聞きやすい放送にしていきたい」と元気に話していました。また、メンバーの石橋美季さん(教養学科2回生)、黒田圭子さん(教養学科1回生)、中島光君(柏原市民、大学生)も見学が刺激になったと話し、「かしわらじぃをもっと多くの聞き手が支持してもらえる内容にしていきたい」と声を弾ませていました。

FM大阪を見学(8月31日)

顧問で地域連携コーディネーターの関隆晴教授は「ラジオという枠の中で人に語ることは教師の話とは違う難しさがあります。番組制作、プロデュース、プレゼンテーションする力は学校現場や企業などに就職したときに必ず役に立つ教師の資質です」と話しています。

「FMかしわらじぃ」の放送は、月曜日から金曜日までのAM11:00~11:30の月2回で、リアルタイムで聞くことができない場合、柏原市のホームページ(PC版)からダウンロードして聞くこともできます。

http://www.city.kasiwara.osaka.jp/fmradio.html

(広報室)

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）の研究開発をスタート

「ラスカー賞」受賞、iPS細胞の山中教授（同校卒業生）が講演

「夢は、科学オリンピックに生徒が出場し、活躍することです」――。岡博昭副校長は今年度から研究開発活動をスタートさせたSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）にこう期待を寄せます。

今年7月13日、同校卒業生でiPS細胞を世界で初めて作り出した京都大学の山中伸弥教授（iPS細胞研究センター長）が「iPS細胞が作る新しい医学」と題して生徒らに話しました。基調講演会には生徒200人のほか、保護者160人、大阪のSSH関係者も加わり、約450人が参加しました。

「ips細胞による再生医学のお話など、実にわかりやすく解説していただきました。生徒らは、偉大な先輩から直接話を聞くことができ、大変に刺激を受けたようです」と岡副校長。

講演する山中教授
9月14日、米国で最も権威がある医学賞で、ノーベル賞の登竜門ともいわれる「ラスカー賞」の今年の受賞者にも選ばれました。

SSHは、将来の国際的な科学技術系人材を育成することをめざし、理数系教育に重点を置いた研究開発を行う文部科学省の事業で、平成14年度から指定が始まりました。平成21年度現在、全国で106校が指定されており、平成21年度から附属高校天王寺校舎が新しく加わり、5年間の研究開発に踏み出しました。

初年度の今年は、1年生168人のうち約90人の生徒がプルーフコースを選択し隔週の土曜日に授業を実施しています。

研究活動の柱は、①学校設定科目「プルーフ」で課題解決型の探求活動を行う②「科学英語」や「論文講読」で語学のレベルアップを図る③「生命論」や「環境論」で社会的、倫理的視点を養う④「サイエンスアドベンチャー」で国際性を養う――で、学年ごとにステップアップ学習が用意されています。集約の3学年では約1週間のインターンシップや研究成果の発表なども予定されています。

この「プルーフ」は平成7年度から継続している研究活動で、生命、環境をテーマにした「生命論」「環境論」についてもSPP（理数系教員指導力向上研修）の指定を受け、研究してきました。

「最初の3年間、毎年、SSHに申請してきました。今年度、晴れて文科省からSSHの指定を受けたのは、評価に工夫を凝らしたからだと思います」（岡副校長）。研究開発活動の検証は、金沢工業大学が開発した目標指向を測定するアクロノール・プログラムを高校生向けに改良した評価方法を導入しました。

同校では、山中教授のような世界の第一線で活躍する研究者を招いて、科学への興味・関心を刺激してもらう講演会を今後も開く予定です。研究開発は国内外の大学、研究施設と提携するのはもちろんのこと、保護者の支援や、卒業生らで構成する「附属天王寺の科学教育を支援する会」のバックアップが何よりも力強い味方となっています。この秋に開催する「教育研究会」（11／14）で、SSH指定1年目の研究成果を発表する予定です。畦浩二校長は「教職員と一体となって推進し、研究成果を上げていきたい」と話しています。

（広報室）

コーラスで地域や学校現場に貢献

教員養成課程◆音楽教育講座◆教授
寺尾 正

わたしは学生に声楽の授業を行うに当たって、「楽しいかどうか」をポイントにしています。学びのプロセス（演習）が楽しいと、上達も早く、スキルも、表現力も増してくると思うのです。

音楽という芸術が生み出す成果には形がありません。形のないものを追求するからといって、指導は抽象的であってはならないと思っています。従って、学生たちに対する技術的な指導法は「具体的に」がモットーです。

本来、音楽という教科は、他教科と違い、多くの場合「集団で行う」活動が多く、「一緒に育つ」ことができるという特徴をもつと考えます。ですから、将来教員になる学生たちには、彼ら自身が集団の中で学び、一緒に成長する喜びを味わってほしいと思っています。従ってわたしの授業では、ほとんどを集団で行っています。たとえば、通常個別に行われる独唱の授業でも、一人ひとりのレッスンを受講者全員で見守るというスタイルを取ります。演奏が終わると、メモ用紙に一人ひとりがメモを書き、演奏者に手渡します。それには演奏に対する感想やメッセージが書かれます。いわば励ましの「てがみ」といったものです。授業のおわりには全員で、「今日の授業はこうだった」と言葉によってまとめることにしています。

また、今年で6回目となった柏原市民文化会館リビエールホールで行われる柏原市民の文化交流行事「リビエールわくわくフェスタ」にも、柏原の一市民団体の立場で学生合唱団として出演します。そのなかでは演奏のみならず、学生自身が運営を担う部分も年々多くなっています。各出演団体との調整や連絡も学生が行い、公演のプログラミングや司会進行など、催し物全体のプロデュースの一部を学生が担当するようになりました。その結果学生たちの演奏会への意識が高まり、演奏表現にも一層磨きがかかってきたように思います。このような経験で培った力は、彼らが教師として学校現場に勤務した場合、子どもたちの学芸会や演奏会などの行事の運営を推進する際に必ず役に立つはずです。

地域住民との独自の連携も積極的に推進しています。毎年恒例となった市立柏原病院・院内コンサートをはじめ、学生の自主的な演奏会であるコーラスセッションvol.6では、柏原市民と一緒に舞台に立ち、合唱する場を作ることができました。地域の方々との音楽を通したコミュニケーションがより深まったという確かな感触を得ています。また、大阪府内の小・中学校へ演奏に行くことも多いのですが、その際、必ず最初に校歌を歌います。校歌の伴奏楽譜が学校にない場合も多く、その際は作曲専攻の学生が編曲したり、プログラム全体の内容を相手先の先生方と打ち合わせて決定する仕事も行います。

柏原市立病院 院内コンサート

最後に、今、力を入れているプロジェクトを紹介します。それは、小・中学校音楽授業向けのデジタル教材を作っていることです。その第1弾『わらべうた編＆コーラス編集』のDVDができあがりました。附属平野小学校の子どもたちと、音楽教育専攻の学生、大学院生等によるコーラスをコンテンツとして盛り込み、「だれもができる合唱指導」の教材として作り上げることができました。このデジタル教材を、本学のホームページから配信できるように計画しています。

本学はいま、発信する大学をめざしています。この取り組みによって、学校現場の音楽指導の充実に寄与できればと願っています。

「表現」に視点を置いた読み

教養学科◆日本・アジア言語文化講座◆准教授
石橋 紀俊

わたしは教養学科で日本の近現代文学を教えていますが、1回生向けの教養基礎科目に「読むための視点」という授業があります。この授業は、ひと言で言いますと、文学作品を読む視点を「表現」に置くということを打ち出しています。

学生たちは、中学・高校時代に、国語科の授業で文学作品を読む指導を受けてきています。ただ、その読み方の多くは、作品に出てくる登場人物の心の動きや内面を捉え、作品の主題や作者の意図に迫るという読み方であるように思えます。言わば内容を中心としたその読み方自体、もちろん立派な読み方の一つですが、わたしの授業では、まず何よりも、その作品がどのような表現で書かれているのかという問いを学生に発することにしています。すると、自ずと表現の仕方を通して、作品に向かい合うことになります。その上で、あらためて表現から見えてくる主題を洞察するという試みを実践しています。

ここに、絵があります（別掲参照「ルビンの壷」＝『読むための理論』世織書房より）。普通に見ると、真ん中に花瓶がある絵に見えます。しかし少し見方を変えてみると、人の顔のシルエットが両側に描かれていることに気づきませんか。文学作品もまた、見方を変えると、同じ作品がまったく違う作品に見えてきます。そのことに気づくための視点の一つが表現なのです。

夏目漱石の『坊っちゃん』を例に見てみましょう。普通にこの作品を読むと、「親譲りの無鉄砲で子どもの時から損ばかりしている」主人公の坊っちゃんが繰り広げる痛快な物語に見えます。それはそれでもちろん間違いではないのですが、視点を変えて、印象的な他の登場人物に焦点を当ててみます。うらなり君はマドンナと許嫁の関係でありながら、お人よしで消極的な人柄のため、積極的な教頭の赤シャツにマドンナを奪われ、失意のうちに延岡に転属させられることになります。坊っちゃんは怒って赤シャツを殴り、学校を追われる…。表面的には破天荒な主人公が描かれているように見えますが、この話を違う視点で見ると、マドンナという女性を争奪し合う三角関係の物語が潜在的に進行しているのです。

ルビンの壷

ただし三角関係の中心にいるマドンナの台詞は、小説のなかにほとんどありません。つまり沈黙を強いられているのです。ただ沈黙もまた表現の一つです。なぜ沈黙せざるを得ないのか、マドンナの沈黙が表現しているメッセージを読んでみる。そのような視点で作品を読み直すと、また違った主題が見えてきます。主人公の坊っちゃんにしても、よく読むと、孤独な青年像が浮かび上がってきます。

物事を違う視点から見るということは、社会で起こる様々な出来事を多角的に捉える力にもつながります。学生たちには、文学をきっかけにして、社会や自分自身を多角的に捉え直す視野を広げていってほしいと思っています。

自由に学ぶ、至福の6年間

◇米子市美術館館長◇ 正井 三枝子
［二〇〇〇年 教養学科芸術学コース卒業
二〇〇二年 芸術文化専攻修士修了］

２００７年４月から、米子市美術館に館長として勤務。文化都市を志向する米子市は、２００７年３月、初めて米子市美術館の館長を公募した。・正井は応募締め切り２日前にそれを知った・・

授業やいろいろな情報から、美術館に変革の時期が到来し、各地の美術館で様々な試みがなされていることを知っていたし、また、音楽と美術の両方が解かる人間が美術館に関わることも良いことと、ある教授からおっしゃって頂いたこともあり、最終日の夕方、意を決して応募用紙に書き込み、事務局に持参した。忽ちは頭の上部の切れた証明写真しかなかったのだが…。

親の転勤で小学校は3校かわるものの、幼少期から始めたピアノは、移動先の指導者の評判を聞き、何とか入門し、途中でレッスンをやめることはなかった。高校の現役時に受験で失敗するものの、ピアノ専攻で卒業後も引き続きピアノと作曲のレッスンはコンスタントに続けつつ、(株)日本楽器広島支店で講師を務めた。

さらなる進歩を望み、当時師事していたピアニストの勧めで、パリ国立音楽院夏期セミナー(ピアノ:ピエール・サンカン)を受講ディプロマ取得。後に、富士通コンサートにて、バルトーク弦楽四重奏団と共演。終了後何か物足りなさを感じ、再度大学入試にチャレンジ。すっかり忘れている世界史や生物・英語等々の受験勉強も面白くなり、ついに、この世界に入ってしまった。

現役当時、"東京では芸大、関西では大阪教育大"とアドバイスされた先生の言葉が基準となり、大阪教育大学教養学科芸術学コースに入学。美学研究室で、哲学・美学・美術史学をとり、大学院修士課程では造形芸術を専攻。修了後、鳥取大学医学部精神行動医学分野博士課程に進む。２００４年４月から鳥取大学医学部(米子市)に大学院生として在籍するも、研究はなかなか進まず、教授の診察のアシストや看護師の方々への音楽療法の研修を担当。修士課程での研究「カンディンスキー　心の叫び」の不可欠の裏づけは、彼自身が試みたと同様、手法が難しいものである。

カンディンスキー(１８６８～１９４４)は、抽象絵画の先駆者であり、芸術における精神的なものに着目し、著書も多い。また、自身も優れたヴァイオリニストであった。これが、研究のきっかけであり、底流を成すものである。

最後に、大学で学ぶということについて。今の若者たちの中には、勉強することの楽しさを知らない人が多いと感じる。厳しい受験競争をくぐり抜け、めざす大学に入学することが最大のゴールであるかのようで・・。わたしの場合は、入学すると、この時とばかり英語も仏語も独語(欧米言語コース)もそして、取れるだけ多くの講義を取り、毎日学び舎へと山登りをし、自由に勉強に勤しんだ。素晴らしい教授陣と素晴らしい環境の中で、至福の6年間を過ごせたことは、わたしの人生で大きな宝物となった。

教えることは未来をつくること 教師の威厳（オーラ）を身につけて

◇韓国舞踊家◇ 蔵重（くらしげ） 優姫（ウヒ）
［1997年 小学校教員養成課程社会専攻卒業］

わたしは韓国舞踊家です。小さい頃からバレエやスイミングにも熱中していましたが、韓国舞踊に次第にはまっていきました。

10歳の時、韓国伝統打楽器・チャンゴを知ったのが韓国舞踊をやるようになったきっかけです。オモニ（鄭早苗）が、閔栄治さん（韓国伝統打楽器チャンゴ、横笛デグム奏者。現在、散打－SANTAのリーダー）の演奏に魅せられ、習い始めさせました。

大阪教育大学時代、韓国舞踊をはじめ、本格的に伝統舞踊を学びたい気持ちが高じて韓国留学へ。ソウル大学大学院で学びながら、韓国のプロ舞踊団に所属し、多くの舞台を踏んできました。師にも恵まれました。

大阪教育大学を選んだのは、漠然とですが、子どもを教育していくことに魅力を感じていたからだと思います。韓国舞踊の道に進んでも教えるということが好きで、今は、東京韓国学校や教室、プライベート・レッスンなどで、韓国舞踊を教えています。

…東京都世田谷区にある「茶房李白」は東京の住宅街にひっそりとたたずむ韓国の古民家。オーナーは80歳の日本人。韓国・朝鮮の文化や歴史に造詣が深く、そして本物志向の「こだわり屋」で、李白の建物に使われている窓や戸口、門、そしてさりげなく置かれている民画や骨董までもが李朝時代にこだわった品々。そこで毎月一回、ライフワークのように国楽の宴を主催し出演したりしています。韓国伝統芸能の本来のあり方を考えつつ、昔の妓生（キーセン）と呼ばれる韓国伝統芸能の先輩たちに少しは近づけるかと企画しました。

韓国伝統芸能の世界には儒教文化が色濃く反映しています。先生のおっしゃることは絶対で、そして生徒は先生を尊敬する。そのことが、韓国社会には、先生は先生らしく振舞い、生徒は習い学ぶという"師弟関係"が存続する土壌があります。

子どもを教えることは楽しい。教える一つひとつが、子どもたちにどのように響くのか？教えることは未来をつくることだと思います。素晴らしい営みであり、教える側には責任があると思います。わたしも、常に舞踊の精進を怠らないようにしています。

さらに、教師には威厳というかオーラが備わっているべきです。教師をめざすみなさんも、威厳（オーラ）の元になる何らかの自信を大学4年間で身につけてほしいと思います。

舞踊を教えながら、いつか一緒に舞台を作ろうと後輩たちを育成しています。主な活動の舞台は東京ですが、12月には「SANTA」の大阪公演を予定しています。

受験生、進路担当の皆さんへ

大阪教育大学がめざすもの

大阪教育大学長
長尾 彰夫

大阪教育大学の教員養成の伝統

我が国が明治・大正・昭和にかけて近代化を成し遂げ、欧米の先進国に互して今日の繁栄を築き上げることができたのは、すぐれた教育制度と学校教育、それにそれぞれの時代の学校教育を担った教員の力によるものであるといわれています。我が国は様々な先進的な産業技術分野で世界をリードしていますが、学校教育も我が国が世界に誇れる先進分野なのです。

大阪教育大学は、このような日本の教育とその発展を担ってきた大阪府下の2つの師範学校を母体に、1949年に大阪学芸大学として創設され、今年60周年(創基135周年)を迎えました。創設以来、すでに約5万人を超える卒業生は、学校教員を中心に様々な職業分野で活躍しています。

1967年には大阪教育大学と名称を改め、その後1988年には教養学科を創設するとともに、金剛生駒紀泉国定公園内に位置する緑豊かな柏原新キャンパスに移転し、西日本最大の教員養成大学として、充実した教育体制を整えるに至っています。

大阪教育大学は、これまでの伝統と実績を踏まえ、2010年から学部を一部改組し、新しい教育体制を目ざしています。

子どもたちと向き合う魅力ある教員の育成

時代がどのように変わろうとも、大阪教育大学は常に子どもたちと向き合い、子どもたちの成長を支え、子どもたちを勇気づけ、子どもたちに生きるすばらしさを伝えることのできる教員の育成をめざしてきました。教員をめざす人たちには、子どもたちの成長と子どもたちの未来に対する強い関心、すなわち教育への使命感が必要です。また、人間の成長や発達についての深い学問的理解が必要です。さらに日々の学習指導には、各教科の専門的知識と各教科に応じた確かな指導力が欠かせません。

大阪教育大学は、幼稚園教員養成課程及び学校教育教員養成課程を置き、約160名の専任教員によって専門性の高い教員養成を推進します。また、近畿で唯一の養護教諭養成課程を置き、保健室の先生も育成しています。さらに、特別支援教育教員養成課程では、全国でトップレベルの教員組織を整え、特別なケアを必要とする子どもたちの教育にあたる教員を養成しています。このほか、天王寺キャンパスには、夜間に学ぶ小学校教員養成5年課程(第二部)を置いています。この5年課程には、短期大学卒業者や、4年制大学の卒業者・中退者、さらには社会人に教職への道を拓く3年次編入制度も設けています。

これから教員をめざす皆さんには大きなチャンスがあります。希望をもって大阪教育大学にチャレンジしてみてください。

新時代の教養豊かな個性的人材の育成

大阪教育大学は、教員養成課程のほかに、他の教育系大学・学部にはない教養学科を設置しています。教養学科では、8専攻6コースを置き、約110人の専任教員が各専攻・コースの専門教育を担当するほか、全学に教養教育を提供しています。近年、我が国の教育において、あらためて教養教育の重要性が強調されるようになってきました。社会がめまぐるしく変貌する中でも、時代や地域を超えて生き続ける普遍的な知識や価値があります。これからの社会を担う若い世代は、陳腐化の早い目先の技能や知識よりも、むしろ幾世代にもわたって生き延びた普遍的価値に触れながら、幅広い人間性の基礎を築くことが重要です。世界の大学教育では当たり前とされてきたこのような考えが、ようやく我が国でも重視されるようになってきました。

大阪教育大学では、20年も前に、このような大学教育の理念を先取りして教養学科を設置し、すでに約4千人の卒業生を様々な職業分野に送り出してきました。教養学科の各専攻・コースでは、学生の将来の職業選択を視野に入れた専門教育を重視しますが、専攻によっては中学校、高等学校の教員をめざすことも可能となっています。豊かな教養と個性、創造性をもってこれからの社会に貢献しようとする意欲ある皆さんのチャレンジを期待します。

大阪教育大学教育学部の改組について

大阪教育大学では、より今日的課題に対応したカリキュラムとするため、教員養成課程及び教養学科を改組しました。

■教員養成課程

〈改組前〉

課　程	系・専攻	募集人員	入学定員
幼稚園教員養成課程		15	15
小学校教員養成課程	教育科学系	50	290
	総合認識系	10	
	人文・社会系	85	
	理数・生活系	90	
	芸術・体育系	55	
中学校教員養成課程	教育科学専攻	10	105
	国語専攻	8	
	英語専攻	8	
	社会専攻	10	
	数学専攻	15	
	理科専攻	15	
	保健体育専攻	8	
	技術・家庭専攻	15	
	音楽専攻	5	
	美術・書道専攻	11	
特別支援教育教員養成課程		45	45
養護教諭養成課程		30	30

〈改組後〉

課　程・専　攻		コース	募集人員	入学定員
幼稚園教員養成課程			15	15
学校教育教員養成課程	教育科学専攻		60	395
	国語教育専攻	小・中	48	
	英語教育専攻	小・中	20	
	社会科教育専攻	小・中	55	
	数学教育専攻	小・中	47	
	理科教育専攻	小・中	55	
	保健体育専攻	小・中	30	
	技術教育専攻		10	
	家政教育専攻	小・中	20	
	音楽教育専攻	小・中	18	
	美術・書道教育専攻	小・中	32	
特別支援教育教員養成課程			45	45
養護教諭養成課程			30	30

教員養成課程では、小学校教員養成課程及び中学校教員養成課程を統合した学校教育教員養成課程を新設し、教育科学専攻をはじめ１１の専攻を設置しました。教科立ての専攻では、専攻内に小学校コースと中学校コースを設け、得意分野を持ち、教科指導に強い教員を養成するとともに、小・中学校両校種の教員免許の取得を促します。また、教職基礎科目、教職教養科目という分野科目を設け、義務教育段階を中心とする校種を超えた学校教育の様々な課題に対応できる実践的な能力の基礎づくりを行い、教育課題に応えた質の高い教員養成をめざします。

■教養学科

〈改組前〉

学科	専　攻	コース	募集人員	入学定員
教養学科	人間科学専攻	生涯教育計画論	20	405
		人間行動学	20	
		発達人間福祉学	25	
	文化研究専攻	日本・アジア言語文化	20	
		欧米言語文化（英語圏・フランス語圏・ドイツ語圏）	20	
		社会文化	25	
	数理科学専攻		40	
	自然研究専攻	物質科学	30	
		生命科学	15	
		自然システム	15	
	情報科学専攻		40	
	スポーツ・健康科学・生活環境専攻	スポーツ	25	
		健康科学	25	
		生活環境	10	
	芸術専攻	芸術学	10	
		音楽	45	
		美術（書道を含む）	20	

〈改組後〉

専　攻・コース		募集人員	入学定員
教養学科	人間科学専攻	55	405
	文化研究専攻　日本・アジア言語文化	20	
	文化研究専攻　欧米言語文化	20	
	文化研究専攻　社会文化	25	
	数理科学専攻	40	
	自然研究専攻	60	
	情報科学専攻	40	
	健康生活科学専攻	35	
	スポーツ専攻	35	
	芸術専攻　芸術学	10	
	芸術専攻　音楽	45	
	芸術専攻　美術・書道	20	

教養学科では、人間科学専攻、自然研究専攻のコース及び文化研究専攻欧米言語文化コースの圏を専攻又はコースとして統合し、募集区分を大括りするとともに、入学後に履修分野を選択できるようにしました。また、スポーツ・健康科学・生活環境専攻をスポーツ専攻と健康生活科学専攻に分けるとともに、社会的に要望の強いスポーツ分野については、募集人員をこれまでより１０人増やしました。こうした改組により、より充実した大学教育をめざすことにいたしました。

教育実習を軸に改革を

～「現場との往還」推進プロジェクト～

教職教育研究開発センター センター長　森　実

当センターが計画している「教育実習など現場との往還を軸とする教員養成改革研究プロジェクト」が、本格的に展開されようとしています。教員養成の改革は、大阪教育大学が全学レベルで考えていかなくてはならない重点事業の一つです。当センターでは教育実習など現場で学ぶことの関連を軸にアプローチしています。

「現場との往還」――。大学と学校現場との間で、人が常に行き交うという意味で、大学の1回生から学校現場に頻繁に足を踏み入れ、自己を振り返りながら"教師力"を身につけてもらうというのがねらいです。教員養成に関わって以前から使われているキャッチフレーズであり、当センターとしてもこのフレーズのもと、本学の教員養成の在り方を改革していこうと構想しています。

学外からも学びます。たとえば、弘前大学（青森県）では平成15年度に「教員養成学部」を新設。恒常的な教育実習と「望ましい教員像」実現をめざした具体的方策をスタートさせました。17年度には、事業推進の母体となる「教員養成学研究開発センター」が設置され、学校現場の声を教員養成活動に反映させる活動が繰り広げられています。同センターには、昨年度、本学の教職センタースタッフも訪問しました。

学び直しセミナーで力を入れる人間関係づくり

「それぞれの教育学部、教員養成系大学の立地条件、規模、歴史等に応じて、オリジナルな教員養成学があるはず」……、これが、弘大からわたしたちが学んだ「教員養成学」のコンセプトです。現在、「大阪教育大学ならではの教員養成学」を模索していこうと、外部講師を呼んで講演会を開き、様々な文献を読み、議論をたたかわせるなど、本学の状況と重ねつつ教師教育学、教員養成学等を学習・研究しています。

文部科学省も、学生が4年間を通じて教師としての資質向上を身につける「教職実践演習」（仮称）の構想を示し、平成25年度には教員免許状の必修科目とするよう打ち出しています。本学としても、野田副学長を先頭に鋭意検討を重ねています。

さて、本学にはすでに「現場との往還を軸とする教員養成改革」に通じる活動があります。そのひとつは「小学校総合認識系」（小総）です。

小総の学生たちは、柏原市の小学生たちと稲を育て、食を考える「食農プロジェクト」、僻地や離島の学校で2週間から1か月にわたってお世話になる「遠隔地教育実習」、海外の学校で子どもたちと交流し授業する「海外教育実習」などに取り組んできました。必要経費は基本的に個人負担です。1回生のときから、様々な形で学校現場に身を置き、子どもたちと触れ合う、"教育実習"を経験しているのです。しかもこうした取り組みの中では、小さな集団の中でもまれながら成長します。教員になると、否が応でも数十人のクラスをまとめなければなりません。ときには人とぶつかり、人間関係づくりの機微を体得していかなくてはならない。このことは机上の学問では身につかないものです。学生時代から体で覚えなくてはなりません。

また、「社会人のための学び直しセミナー」も、これからの教員養成を考えるときに大いに参考になります。このセミナーには、教員採用が限りなく狭き門であった一九九〇年代に大学卒業を迎えた人たちに、もう一度チャレンジする応援をしようとするものです。

小総の学生たち

そのほかにも、当センターのスタッフが関わって進行している学内外の動きがあります。幅広く多くの方のご意見をいただきながら、本学の教員養成の理念と具体像を追求します。多くの方のご意見とご参加を楽しみにお待ちしています。

フットワークが信条！ 広報室です

広報室は大阪教育大学の広報活動を中心的に担うセクションとして今年度、発足しました。

開学60周年（創基135周年）を契機に”発信する大教大“として新たな歩みを踏み出した本学の広報戦略を推進するもので、スタッフは広報担当の成山治彦理事、広報担当学長補佐の小野恭靖教授、広報マネージャーの佐藤安市、広報担当事務補佐員の好川菜々の4人です。

日常的には、佐藤、好川の2人が”記者“、”編集者“、”カメラマン“となり、柏原、天王寺両キャンパス、附属学校園等をフィールドに活動します。

佐藤は、教育関係出版社に勤務の元記者・編集者、好川は留学生係（現在、国際係）で3年勤務し、今年4月から広報室で働いています。現役のアマチュアボクサーでもあります。今号の広報室作成記事の文は佐藤、写真は主に好川が担当しました。

時々の行事の取材や、インタビューなどで、教職員、学生・生徒の皆さんの許にお邪魔をいたします。何か、ニュースとして発信してほしいこと、面白いネタがございましたらご一報ください。フットワークの軽さが信条です。

事務局棟4階企画課内にデスクがあり（内線3344）、お見かけしたら、気軽にお声をかけてください。

Email kouhou@bur.osaka-kyoiku.ac.jp
Tel 072-978-3344
Fax 072-978-3225
（広報室）

スタッフ自己紹介

目標はオリンピック

広報室スタッフ　好川 菜々

もともとマラソン選手に憧れトレーニングをしていましたが、ある日トレーナーから女子ボクシングの存在を知り、「やってみないか？」というひと言がきっかけでボクシングを始めました。

当時、練習場所や道具も十分でない環境の中で続けて3年後、女子ボクシングが日本でアマチュアスポーツに公認され、いつか日本一にそして世界へという大きな目標がわたしをどんどん熱くさせていきました。

2006年の全日本大会では念願の優勝を果たし、2008年には2度目の優勝を達成、2008年の秋には日本から初の世界選手権日本代表として出場しました。マンションの屋上を練習場所としていた時から10年、今では世界の舞台で試合に臨めるまでになりました。

しかし世界では思うように結果が出せず何か方法はないかと悩む中、出した結論は3ヶ月間アメリカで練習をし、8月の世界選手権に挑むということでした。今年5月末に渡米し、その結果、優勝には手が届きませんでしたが、初めての勝利を手にし、決勝までコマを進めることができ、目標に一歩前進できたように思います。これからも広報室のスタッフとして、オリンピックをめざすボクサーとして両立していきたいと思います。

戦績

55戦 40勝 19KO／RSC（H21年10月現在）

主なタイトル

2009年 世界選手権 フェザー級 日本代表 準決勝進出
2008年 世界選手権 ライトバンタム級 日本代表（中国寧波市）
全日本大会 ライトバンタム級 優勝 二階級制覇
2007年 近畿選手権 フライ級 優勝 最優秀選手賞
2006年 全日本大会 フライ級 優勝
2005年 全日本大会 フライ級 準優勝

2009年10月発行　企画・編集・発行／国立大学法人大阪教育大学企画課 広報室　webページ／http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/

平成22年度入試日程（平成22年4月入学）

区分			出願期間	入試日	合格発表日
教育学部第一部	センター試験を課さない推薦		11/1～6	11/21・22	11/27
	センター試験を課す推薦		11/1～6	11/21	2/9
	私費外国人留学生		12/14～18	1/31	2/9
	一般	前期	1/25～2/3	2/25・26	3/6
		後期		3/12	3/23
教育学部第二部（夜間）	小学校5年課程	前期	1/25～2/3	2/25	3/6
		後期		3/12	3/23
	小学校5年課程3年次編入学		1/5～8	2/13・14	2/19
特別支援教育特別専攻科	特別支援教育専攻		12/14～18	1/30	2/9

入試日程に関するお問い合わせは入試課 TEL072-978-3324までお願いします。

卵形の新しいロゴマークが誕生

ロゴタイプ、シンボルカラー等も新たに設定

国立大学法人大阪教育大学のロゴマークがリニューアルされ、大学名を表す書体（ロゴタイプ）とシンボルカラーも新たに設定されました。（写真）

新しいロゴマークは、開学60周年（創基135周年）を記念して、本学教職員と学生で構成する「ロゴマーク等策定委員会」（委員長＝成山治彦理事、委員12人）において、今年2月から検討されていたもので、同委員会が作成した基本方針に基づき、依頼を受けた江藤亮准教授（教養学科芸術コース）が制作しました。

委員会により作成された基本方針とは（1）歴史と伝統を踏まえつつ、地に足をつけて力強く未来へ前進する本学の姿勢を学内外に印象付けること（2）本学のアイデンティティである「教育」「信頼」が感じられるデザインであること、の2点です。

国立大学法人
大阪教育大学

そこで、昭和27年に策定されて以来、本学の学章として受け継がれてきた「大学」（旧字体）を「両手」で包むデザインが新ロゴマークへ継承され、新たにその輪郭として「卵」のフォルムが採用されました。

「卵」には可能性を予感させるイメージがあり「未来へ向けた可能性の提供」という教育の本質と「可能性の象徴」としての卵のイメージとを重ねあわせることで、本学のアイデンティティの軸である「教育」が表現されています。と同時に本学が、さらには「教育」そのものが、未来へ向けてより一層成長し、発展していくことへの願いも込められています。

ロゴタイプは、ロゴマークと大学名を併記する際に用いられることを前提にデザインされ、明朝体の優雅さとゴシック体の力強さを兼ね備えた書体によって構成されています。

シンボルカラーは、従来のロゴマーク等で使用されてきた「えんじ色」を踏襲しながら、より若々しさが感じられる色が採用されています。シンボルカラーの他に数種類のサブカラーも設定され、シンボルカラーとの組み合わせにより、多様なデザイン展開が可能になっています。

今回策定されたこれら新ロゴマーク、ロゴタイプ、シンボルカラーは各種広報物や大学の公式グッズ等に活用され、本学の象徴として学内外に広く発信されることになります。

ロゴマーク等の詳細については、ＷＥＢページをご覧ください。http://www.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/kikaku/outline/newlogo.html

『天遊』とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。

記念碑の揮毫は、水嶋 昌（山耀）本学名誉教授によるものです。

本誌にご意見をお寄せください

本誌『天遊』は今後の誌面づくりに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを綴じ込みのアンケートハガキによりお聞かせください。

●宛先　〒582-8582　大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1
国立大学法人大阪教育大学企画課　広報室
TEL.072-978-3344　FAX.072-978-3225
E-mail　kouhou@bur.osaka-kyoiku.ac.jp
ホームページ　http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/

PRINTED WITH SOY INK™
アロマフリー型大豆油インキを使用しています。
再生紙を使用しています。
この印刷物は、10,000部を1,029,000円で、すなわち1部102.9円で作成しました。